

新潟県における農業ことはじめ

上 田 勇 五

新潟県において明治末期より大正中期頃までの間に、どんな農業が研究され、又使用されていたかを文献により紹介する。

1 新潟県農事試験場成績要報

明治39～41年に表題の短篇が第1より第20迄刊行されている。色刷の表紙で分り易く記述された普及版である。

その第1は「除虫菊の作り方」、第18は「除虫菊粉合剤」である。前者は苗の仕立方、菊の育て方、収納の仕方、除虫菊粉の使い方などを述べているが、評判が良かったとみえて、後者の序文で「12ヶ月を出でずして欠本となり……」とあり、「前報の不足を補い且つ附録として除虫菊の作り方を添え……」とある。除虫菊石鹼合剤、除虫菊麦粉合剤と費用について解説している。

第11は「ボルドウ合剤」でフランスにおけるミラード教授の発表より22年後のことである。ボルドウ合剤について歴史、処方、製法、適否、性質、人体との関係、主治効能、散布時期、費用、実験成績、散布の実行、と項を分けて記述している。実験成績としてはキュウリ、ネギ、ナスに散布し、使用したものは使用しないものより収穫が多く、やすい市価で見積っても必要経費を差引いて利益が大きいことを算出して示している。

第17は「石油乳剤」で序文に「当今害虫を殺すに用ふる薬剤は非常に多く……しかれども値段の高いものは良くきくが……価やすきにもかかわらず割合効能著しきは石油乳剤……」とある。果樹の介殼虫、果樹の綿虫、果樹蔬菜の蚜虫、食葉甲虫の幼虫、アオムシ、ケムシ等を対象としているが、蚜虫、アオムシ、ケムシには除虫菊粉加用石油乳剤が良いとしている。

2 野津六兵衛先生の手紙

大正より昭和21年まで島根農試に在職されて害虫関係の研究で大活躍された野津六兵衛先生は、島根に赴任される前の明治43年より大正2年まで、わずか3年半であるが新潟農試に在職された。現在89才の御高令乍らなお

お元気のように、私は約20年前に新潟農試在職中の研究の想出についてお手紙をいただいた。その中で農業に関しては、二硫化炭素燻蒸、青酸ガス燻蒸、毒剤の使用試験と普及、石灰硫黄合剤の普及などが記されているが、「明治44年梨に毒剤散布試験を行った。横浜植木商会の輸入品 Arsenate of Lead Paste を使用し、象鼻虫、心喰虫、その他に卓効あり、翌年から一般に使用し逐年毒剤の使用盛となる。日本では当時新潟が最も多く使用し有名になっていた。(桑名伊之吉博士のお話)」とある。

また、青酸ガス燻蒸では容積2万立方尺の大きな紙袋を使い世界記録とのことで、野津先生の著「農業の話」に写真をのせたとのことである。

3 石川滝太郎氏の業績

野津先生のあと大正3年より10年まで石川滝太郎氏が新潟農試に在職された。石川氏はその後消息不明の点が多く、晩年は不遇だったときいたことがある。在職中はきわめて優秀な業績をあげられ、多数の報告をだしておられるが、農業関係では次の報告が顕著である。特別研究報告第2号「石灰硫黄合剤の研究」と特別研究報告第4号「二硫化炭素燻蒸法の研究」で共に大正6年1月に発刊されている。前者については石川式なる調合量を創製し、他式と比較してその優秀性を実証しており、後者については殺象、殺蛾、栗シギ象虫などで試験し、また稲・麦類・豆類などの種子燻蒸をした場合の被害発生条件を明らかにしている。

4 謝 辞

新潟県の硫酸鉛使用量が最も多かったという野津先生のお話は誠に意外であったので、当時どんな販売が行なわれたかを色々と聴取調査したがよく分らなかった。ある人の紹介で古い農業卸して当時病身の小富商店主を田村市太郎先生と共に訪ねたことがある。病身の老人の話は大変ききとりにくかったが、田村先生は熱心にノートされた。このような因縁もあって御退官を記念してこの小文を記し、先生の今迄の御指導に深謝する。